# 教祖が呪い、豚猿が嘲笑う。こいつら、ヒーロー志望なんだぜ……？

かりん2022

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夏油　傑が女主と共に異世界（ワートリ世界）経由逆行転生する話。

トリガーで幸せになろうと頑張った結果大脱線してるよ！

今更呪専に通って原作知識を生かそうなど、片腹痛いわ！

ホモホモしいとの御指摘を受けたので、タグ追加です。

ヒーロールート改め悪の組織ルート始めました。

# 目次


最初は崇高な理念とかあったんだ ―― 1
潜入しようそうしよう ―― 8
生まれる前からの親友です（ガチ） ―― 11
教祖様は約1名に尽くすタイプ（原作準拠） ―― 14
そしてパーソナルスペースが消滅した。 ―― 18
変わる未来 ―― 23
甚爾 ―― 29
黒トリガー ―― 32
元鞘（最終回） ―― 35
トリオン⁇モンスター ―― 38
トリオン⁇モンスター2 ―― 41
トリオン⁇モンスター3 ―― 45
トリオン⁇モンスター4 ―― 48
トリオン⁇モンスター5 ―― 53
トリオン⁇モンスター6 ―― 56
トリオン☆モンスター　いふ！前編 ―― 60
トリオン⁇モンスター　いふ！後編 ―― 64

# 最初は崇高な理念とかあったんだ

ーーはいっ　夏油様を救いたいです！
ーー願いは、己が手で叶えるものだ。

死の間際、そんな声が聞こえて。
私は、呪霊のない世界へと転生を果たしていた。
最初は、自分が猿となったことに嫌悪感を感じた。
でも、どこをどう探しても呪霊なんてなかった。
呪霊も呪術も存在しない場所で、特別がない場所で、猿とかありえない。
そう、私は、その他大勢になってしまったんだ。
拍子抜けした。
平和は、まるで甘い毒のように私を侵食し、そして猫のように適切な距離を持って寄り添った。
そして、完全に油断したある日、猫のように気まぐれに去っていった。

化け物。呪霊ではない。異世界人の誘拐。
かつて親しんだ戦いの日々は犬のように私に尻尾を振って飛びついてきて、ぴっとりと張り付いてきた。
誘拐され、助け出され、組織の一員となり、順当に戦って死んだ。
思い出すのは、いつも悟や家族の事だった。
悟。悟。悟。
私は。

ーーさあ、二人とも。願いを叶えて見せろ……
そんな声を聞いて。私は生まれた。
そして、私は3回目の生に呆然とした。
私は、また呪術師として生まれ変わっていた。
呪霊のいる世界に。夏油傑として名付けられて。呪術高専のある世界に。
正直に言って、戸惑った。
二個前の生の事、それも子供時代なんて殆ど覚えてない。
そもそも二人って誰なんだよ。
前世では必死に取り繕ったが、その気力もなかった。
早々に学校をサボり、機械的に呪霊を取り込む。
その日も、廃墟で呪霊を取り込んでいた。
そこに、人の気配がする。
「夏油様ー。夏油様……？　大丈夫。ここには呪霊はいない、きっといない、いないに決まってる……いたとしてもきっと夏油様が倒してくれてる。多分恐らく絶対メイビーそうでいて……」
私を夏油様と呼ぶ。家族だろうか。信者だろうか。
誰かが、前世の記憶を持ってきてくれた!?
パッと美々子と奈々子、利久の事が思い浮かぶ。
そうだ、あの子達を助けないと!!
「誰だい!?」
そこで恐る恐る屁っ放り腰で入ってきたのは、幼いながらにいかにもオタクな眼鏡をかけた女の子だった。
「夏油様……っ!?　夏油様ですか!?　猿ですけど殺さないで!!　いい話持ってきたんです!!」
「信者の誰かかな……？」
「ある意味信者です、正直すっごく後悔してます……」
呪霊は本人申告の通り、見えないようだった。
それから、私は彼女に誘われるまま、彼女の家へと向かった。
良いところのマンション、ただし鍵っ子のようだった。
彼女は、部屋の机の下からダンボール箱を引きずってくる。

段ボール箱には、『灯里の！』と書かれていた。あかりかな？　猿としか名乗られなかったしね。
「夏油様、手に意識を集中して、トリガーって言ってみた事はありますか？　なければやってみてもらえますか？　こう、呼ぶ感じで」
「トリガー」
　すると、私の手にボロボロと幾つものトリガーが落ちてきた。
「あ、嬉しい！　結構ありますね！」
「これは!?」
「私、死んだ時、『何か』様にあったんですよ」
「何か？」
「『何か』様です。で、ほら、夏油様って転生小説とか読みます？　あんな感じだったもんで、自分が死んだことも認めたくなかったし、小粋なジョークとして、はい、夏油様を救いたいです！　なんて言っちゃったんですよ」
「私を？」
「イケメンだったから、ちょっと好きだったんです。アイドルに向ける感情的な。で、気がついたら、転生してて。ネイバーとトリガーの戦いにがっつり巻き込まれる感じで。もしかして、夏油様もこの中にいたりして……なんて思ってたんですけど、トリガー持ってたからマジですね。誰だったんです？」
「君の前世の名前も教えてもらえる？」
　私は、彼女と名前を交換しあった。現世の名前より先に前世の名前を交換って。
　ぜんっぜん知らない子だった。向こうは私の事、名前だけは知ってたみたいだ。上位だったしね、私。
「探してくれたら良かったのに」
「いやー。中々勇気が出なくて。でも、また転生して。『何か』様の声が聞こえて。そうなると、私、願いを叶えないとやばくないって思って。だって、『何か』様に強請って、お膳立てしてもらった訳だから、やっぱり願い嘘でしたってなったら怖すぎるじゃないですか。お仕置き的なあれが。それに、このまま行くと、夏油様が遠因で日本が滅

亡一直線だし」
「滅亡？」
「夏油様、死んだ後に呪霊操術目当てに体乗っ取られて、その人が大規模儀式して、えーとみんな一つになろう作戦と言いますか、うーん。まあとにかく、渋谷は滅亡、東京は呪霊の楽園、他にも沢山犠牲者が出て、かなりやばい事態になるんですよ」
「悟が許さないはずだ」
「夏油様の体を人質にミミナナも五条先生も一網打がはっ」
灯里の首を絞める手を、引き剥がすのは面倒だった。心が思った以上に荒ぶっている。
殺さなかっただけ上出来だろう。
「……詳しい話を聞こうか」
「そっその前に！　私を殺さないって縛りを結んでください！」
灯里の訴えは至極当然だった。
「そうだね。明日までは殺さないよう縛るよ」
「一生！　一生！」
「それは流石に重すぎるかな」
「うー……じゃあ、一ヶ月殺さないでどうですか？　流石にそれも飲んでくれないなら、お話はこれまでです」
「わかった。【今から一ヶ月の間、君を殺さない】」
「うう、今ので縛れたんですか？　信じますからね？」
「うん。だから早く教えて」
「夏油様の姿で現れることで、五条先生は驚いてしまって、一瞬硬直して、学生時代を思い出してしまったんです。ゴクモンキョー？　って目玉のついた箱に五条先生を閉じ込めるには、それだけの隙があれば十分でした。脳内時間が過ぎれば、ＯＫって条件だった？　ので。後は、ミミナナは普通に夏油様のお体を人質にされて危ない事させられてそれでも夏油様の体を助けようと頑張って死にました」
「っ　利久は？」
「すみません、わからないです」
「ふざけるなよっ」

「だって、他人事だったんです！　まさか、本当にその、異世界転生させられると思わないし！　呪霊とか、全然信じない人だったし!!!
私、猿ですよ、無能力者ですよ、荒事だって無理ですよ!!　ほんの、その場をあっためて現実逃避する小粋なジョークがこんなことになって、本当に、私、怖くて、怖くて、でも、その、もうどうしようもないじゃないですか!!!」
「灯里」
「猿って呼んでください。貴方にとっての戒めで。私にとっての戒めで。絶対絶対忘れないように」
「猿……」
「ねぇ、夏油様。腹を割って話しましょう。貴方は、今もまだ、術師以外、全員死んでしまえって思ってますか？　本当はもう知ってるんでしょう？　呪術師だって呪を産む。非術師を全員殺すなんて非現実的だって。術師にも屑がいるって。貴方が望んだのは、もっと別なんじゃないですか？」
「黙れ猿!!!　猿に何がわかる！」
「わかるよ！　私だって前世じゃ戦ったんだもん!!　そりゃ、呪術師はボーダーよりずっとずっと辛い職業でしょうよ！　でも……でも!!」
　そして、小さくつぶやく。
「戦う痛みは知ってるよ」
「どこだって、大小の戦いはあって苦しみはある。人間だもん。そりゃあるよ。呪霊がいなくたってネイバーがいなくたって、人間がいる限り、ううん、生き物が生きてる限り、戦争はなくならないよ」
　その言葉は、私の心を深く切り裂いた。
「じゃあ、いっそのこと、全員殺すかい？　逆に聞くよ。君の望みはなんなんだ」
「私の望み？　そんなの決まってる。平和を貪る豚猿になること。その為には、夏油様、どうしたって貴方の協力が必要です。貴方が幸せに生きて、死んだら適切に火葬されること。それしかないんです。そして、夏油様が幸せになる為には、呪術師が幸せにならないといけな

い」
「呪術師が、幸せになる？　どうやって」
「例えば、トリガーのペイルアウトを呪術師も使えるようになれば。面白い事が、できると思いませんか？」
「……それは」
「転生特典。転生特典ですよ。転生小説みたいで笑っちゃうけど、ひとまず、トリガーの持ち込みはできました。なら、ついでに言えば、トリオンがあります。前世と比べれば、わらっちゃうくらい沢山あります。上手くいけば、こちらの世界の人達も持ってるかもしれない。持ってるなら、全員が持ってる。最低でも、若い術者だけでもペイルアウトで危なくなったら逃げられるようになる世界。最高は、トリオンで全員呪術師として活動できる世界。そもそもトリオンが呪霊に効くのかとか、逆はどうなのかとか、色々実験が必要ですけど、私も貴方もトリガーの研究はしていましたし、いけますよ。私が呪力がないのも、実験を進める上では、逆に必要まであります。貴方の術式は実験に最適。だから、あわよくば、呪霊戦が死者０の世界目指しましょう」
「無理だよ」
「貴方の掲げた理想よかよっぽど勝率ありますよ」
「できない」
「じゃあまた虐殺する？　五条悟に殺される？」
「……もう、疲れたんだ。私は」
「じゃあ、なんで廃墟にいたんですか。どうせ、平和に生きるなんて無理なんですよ。同じ自分を痛めつけるなら、もっとポジティブに行きましょうよ！」
「私は。苦しい。苦しかったんだ……」
「私だって怖いわよ！　泣きたいわよ！　でもしょうがないじゃない、今ここにこうして生きてるんだもん！　ボーナスタイムを楽しむしかないでしょ!!　どうせもう私達、死んでるもん！　二度も！　これはもう開き直るしかないって！」
　それから、私と彼女は長い長い話し合いをした。

そして、年月が過ぎた……。

私、こと教祖と豚猿は、大企業の支配者兼、お金を出して呪霊を狩る意味のわからないやばい組織ボーダーのリーダーとなっていた。

呪専？　絶賛敵対中である。

どうしてこうなったのか、すぐる全然わからない……。全部豚猿が悪い。

# 潜入しようそうしよう

五条悟は、家入硝子と顔合わせをする。
今日が初顔合わせである。
それにしても、男女で二人っきりとは。
まあ、呪術師は人数がいないからしょうがないのだが。
担任の先生は、夜蛾先生というらしい。
自己紹介を済ませると、早速任務について説明をした。
「潜入捜査？」
「そうだ。お前達には、ボーダーへ潜入をしてほしい」
「一年にやらせる事なの、それ。やばくて良くわかんねー不良集団って聞いたけど」
「彼らは若者しか受け入れない。お前達二人なら可能と判断された」
「俺、こいつのこと知らねーんだけど？」
「私も知らねーよ。こっちは一般出なんですけど？」
「それで良い。それぞれ、別ルートで接触してもらう」
「しかもソロかよ……。こいつ術式持ってねーんだけど、大丈夫なの？」
「せんせー。断ってもいいですか」
「悪いがこの依頼は断れん」
そして、夜蛾は資料を渡していく。
「作戦概要を説明する。潜入対象のボーダーとは、呪霊狩りや模擬戦をゲームとして行う不良チームだ。ボーダーの語源は不明。俺達は報酬をもらって呪霊を退治するが、彼らは参加費を払ってトリガーと言うものを貸与され、呪霊と戦う。その戦いは記録され、動画サイトで公開。高い視聴料が徴収されている。トリガーを使うと身体能力の底上げがされ、また負けるとゲームオーバーとして空に打ち上げられ、おそらくは着地点で回収される。更に、帳を一切用いず、帳が張られると即撤退するのも特徴だな。恐らく、帳を張られると離脱できないのだと思われる。危なくなったら帳を張れ。潜入経路に関してはこっちの紙をみてくれ」

「呪術規定の秘密にガチで喧嘩売ってるよな。てか、魔窟の上層部を持ってしてもここまでしか調べられねーの」
「恐らく、予知の術式の持ち主が運営する企業がバックについている。新興企業ネイバーは、小学生二人が立ち上げてほぼ１０年。その間、流行りの商品の開発や投資、株取引などを行なってその全てを成功させ続けている。呪力を持った社員を集めてもいるな」
「は？　未来予知とでもいうのか？　そんな便利な術式、あるわけねーじゃん」
「……悟は、それについても調査・術式の持ち主がいたら即時捕獲をしてほしい」
「そりゃ喉から手が出るほどほしいだろうけどさ。すげー厄介そう」
「ボーダーが持っている術式は極めて特殊で奇抜、有用なものばかりだ。できれば平和的に交渉したいが、そもそもボーダーへの接触自体が出来てなくてな。とにかく、接触と調査、交渉を試みてくれ。捕獲が一番望ましい」
「そもそも、呪霊を倒してやって金も払うってなんですか。意味わかりません」
「それな。何一つ納得できる行動がねーっていうか……うげ。何この設定」
「不良……。私に演じられるかな」
「お前は問題なさそう」
「貴方もね」

そして、彼らは潜入捜査に向かうのだった。

一方その頃。夏油たちは……

「ウッヒョオオオオオ！　この前のガチレイド戦産土神ＶＳ連合、１００万再生行きましたよ、教祖様！」
パソコンを前にフィーバーする豚猿こと灯里。仕事と趣味をこな

しながらで、頭はいつもフル回転。
甘いものを片っ端から平らげていけば、そりゃあ太るわけで。
豚猿の名が相応しくなりつつあった。
「やれやれ。豚猿はいつも騒がしいね。ねぇ、美々子。奈々子。利久」
「きょーそさま。奈々子、ぶたざる、めっする?」
「きょーそさま。美々子も、ぶたざる、めっできるよ?」
「お、おれもできます!」
「こらこら、子供達。無条件に殴っていいのは呪霊だけだよ。でも、そうだね。豚猿はたまにはちょっと体を動かそうか」
「嫌で……呪霊出した!? 呪霊出したの!?」
ギョッとして立ち上がる豚猿。
「ほら、マラソン1時間しておいで。社内施設なら資料流しながらでもできるでしょ」
「教祖様が鬼畜……!! たまには教祖様も商品開発とか投資とか手伝ってくださいよぉ。教祖様の情報の方が精度高いんですから」
「生憎、仕事漬けで世間には疎くてね。逆行するとか思わなかったし。今は子供達の世話で精一杯かな。ほら、皆でお勉強しようか」
「ああん大黒柱の悲しみぃ!」

平和だった。

## 生まれる前からの親友です（ガチ）

「えっと、非術師だけどぶちのめして良いんだよな？　すげーグレーな気がするんだけど」

戸惑いながらも、喧嘩を繰り返すこと、１０日。

段々楽しくなってきてしまった所に、子連れの青年が飛び込んできた。

「悟！　やめな！　非術師に攻撃するなんて!!」

「??　どこかで会った？」

「ああ!?（キョーソサマ！　初対面！　初対面です!!）　……初対面だよ」

青年がブチ切れかけた後、青年のイヤホンからそんな音が漏れ聞こえて、すいっとキョーソサマとやらは顔を逸らした。

スーハーと深呼吸。

もしかして親戚とかなのだろうか？

「きょ……ゲトーサマ。こいつがゴジョー悟ですか？」

「ゲトー様を殺す子ですか？」

「殺りますか？」

子供達がそんな物騒な事を言う。

呪力が存在しない・妙な雰囲気・イヤホンからの声・むしろイヤホン・珍しい、ネイバー社の社長と一致する名字。どうやら、釣れたらしい。

何らかの形で知り合いなのは間違ないようだ。

もっとも、一方的な知り合いは多過ぎる。それでも、これだけ特徴的な男は忘れないと思うのだが。

なお、もちろん五条の親戚にネイバー副社長はいない。その辺は調査済みで、一般人だとのこと。一般人は教祖呼びされたりしないが。

「そいつら、お前の子？　全員にてねーな。呪力がないのは一致してるみてーだけど」

「厳密には私が成人するまで、弟と妹達だよ。私はまだ法的にこの子達の親になれないからね。ああ、血は繋がってないよ。それよりも強

い絆で結ばれてはいるけどね」
「「ゲトーさま!!」」
ぎゅうぎゅう抱きついてくる子を抱えるように抱きしめる。
そして、ハッとして五条に注意した。
「君は、なんでこんな真似を？　良くないよ！　そんな簡単にぐれるような……ぐれ……ぐれ？　どうしよう、君、案外クズだった気がする」
「ああ!?　何だよいきなり！」
「いや、その。親御さんが悲しまないかい？　もちろん私も硝子も悲しいよ！（キョーソサマ！）」
「硝子と知り合いなの」
「もちろん……（キョーソサマ！知らない人です！）知らない人だね」
「思いっきり知ってるじゃねーか」
「とにかく、彼らが何かしたのかい？」
「普通にムカついただけだけど？」
「むか……っ　弱いものいじめてどうするんだよ」
「強いもん苛める馬鹿がどこにいんだよ」
「そうだった。いやでもそんなまさか」
そして、教祖夏油はイヤホンの女とぼそぼそと相談する。
「どうしよう、豚猿の言ったとおりかも。悟がぐれちゃうなんてまさかそんな」
「（善悪の指針がないですからね、今の彼。危うさで言えば彼もキョーソサマと同程度だったのでは？　プランRします？　危険ですが）」
「そうだけど悟をほっとけないよ」
「（流石です傑ママ）」
全部聞こえているのである。お前は俺の親か。
覚えは全く無いがそれくらい心配されていた。
「悟！」
「呼び捨てんな」
「私も呪専に行くよ」
「は？　見えないのに？」

「それは（キョーソサマ！）こうすれば見えるようになるよ」
教祖夏油の姿がぶれて、呪力が溢れだした。
「私の名前は夏油傑。初めまして、悟」
なんかなんもしてねーけど副社長が捕獲できた。捕獲で良いよな？　これ。なんか罪悪感があるんだけど。

教祖様は約1名に尽くすタイプ（原作準拠）

「じゃあ、お前、呪専に来るってことでいーの」
「そうだね。君が非術師を殴ったこと、一緒に謝ってあげるよ。君には借りがあるからね。君が初めての学校に馴染むまでは一緒にいるよ」
「借りも何も、お前の事、俺、覚えてねーんだけど」
「……君が覚えてなくても、いいんだ」
「ゲトーサマ、泣かないで」
「ゲトーサマ、美々子がいます」
「ゲトーサマ、五条悟なんて忘れましょう！」
「あーもう、俺を悪者にするなよ！　とにかく、来るっつったんだから来いよ！」
「入学準備くらいさせてくれないかな？　ほんとせっかちだよね、悟は」
　そうして、敵の幹部が呪専に入学する事となったのだった。
「夏油　傑だ。傑って呼んでくれ。悟。硝子」
「「呼び捨てすんな」」
「そうか、わかった。じゃあ、殴り合いで勝ったら呼び捨てにしていいかな？」
「パース」
「おー、やってみろよ」
　ということで、傑と手合わせする事になった。
　傑の能力はおそらく、呪霊を配下にする呪霊操術！
　呪力だって普通にすげーある。
　警戒していたが、本当に傑は殴りかかってきやがった。呪霊は!?
「さあ、悟。私に奥の手を使わせられるかな？」
「泣かす」

つよ。
体術だけで結構追い詰められた。
何より屈辱なのは、俺はまだやれるのに、傑が勝手に自ら退いたことだ。俺の弱さに戸惑ってるっぽいのが更にムカつく。
そう、無限は常に張れるわけじゃないし、不意をつかれれば普通に突破される。今みたいに。
なのに、戸惑ってるのは傑の方だった。
「うーん。これ、ずるくない？　ずるいよね」
「何がだよ」
「私は、君に上から目線になりたくないんだよ。でも、精神年齢は上というか」
「喧嘩売ってんの？」
「そうじゃなくてね。うーん。私は君と硝子と一緒に育ちたい。君と硝子と同じ目線でいたい。でも、うーん。私の記憶、消しちゃおうかな？　いや駄目だ、子供達の事まで忘れちゃダメだろ。それに、私って信用できないしね」
「は？　意味わかんねーこと言ってないで、掛かってこいよ」
「今日はもう私の勝ちだろ？　後１０年待ちな」
「は？」
そして、殴り合いになった。
呪霊を出させて、アラームが響き渡る事となった。
あー、呪霊はいちいち登録しないとダメなわけね。
「傑。では、悟と硝子と共に任務についてもらう」

「もうですか？　確か、４級任務からですっけ。げ」
　ペラりともらった紙を見て、傑は声を出す。
「なんで一級⁉　前は四級からだったじゃないですか！　しかもこんなに！」
「まずはお前の実力を測る。無理だと思ったら引き返していい」
「でもこれ、悟も行くんでしょう？　この時からこんな強いの倒せたっけ？　てか今の私でもきついんだけど???　前の私なら瞬殺だよ、瞬殺!!　硝子だって、近づくだけで危ないって！」
「ふざけんなよ！　できるに……ふざけんなよ、なんで特級任務が混じってるんだよ！」
「クズども私を巻き込むな」
　結局俺達は、丸め込まれて送り出された。
「あー。君が倒して、私が取り込んで、その呪霊で援護って形になると思う」
「俺が倒すのかよ」
「間違って祓うなよ？　硝子は安全な場所で待機ね」
　そして、任務へと向かう。
　正直に言おう。
　すっっっげえやりやすかった。
　傑は俺のこと、知り尽くしてる。もう何年も組んでる魂の相方です！　と言わんばかりに連携を完璧に合わせてきていた。
　おやつの好みも知ってて、俺の分まで買って、分けてくれた。
　しかも、俺に気を使い慣れている。
　傑が好きなのはしょっぱいの。でも買うのは俺の好みの甘いので二人で分ける。
　硝子には硝子で買って渡してる。
　そして、すっかり疲れて傑が寝入る頃。
　俺は、担任をすっ飛ばしてお偉いさんの魔窟へと放り込まれていた。
「奴の正体は」
「術式は」

「情報は取れたか」
「あー。傑の術式は呪霊操術です。とりこんだ呪霊を配下にする事ができると思われます。未来視ではありません。ただ、そんな術式あるはずないって思ってましたが、今はそれしかないと思ってます。未来視、というよりは多分、逆行とか、並行世界の自分の記憶を持ってくるとか。彼の俺への信愛と知識と経験は本物です。あいつは、未来の俺を知ってるし、味方だって信じきってるし、多分味方だった。術式はとんでもなくレアで強いですが、常識の範囲内です。まだ仲間がいる」
「ムゥ……だとすると、尋問は不味いか」
「あの感じですと、むしろ普通に聞いたほうが情報量は正確で多いかと」
「わかった。引き続き、情報を引き出していけ。そして取り込め。未来視だろうが逆行だろうが、野放しにしていい術式ではない」
「わかりました」
ふぅ、と大きくため息をつく。
寮の部屋に行くと、傑の寝言が聞こえた。
『硝子ぉ……悟は飲めないって、ダメだって……むにゃ』
「何の夢見てんだよ。お前、敵地なのわかってんのかよ」
やっぱりちょっとの罪悪感と、心配を胸に、俺は眠るのだった。

そしてパーソナルスペースが消滅した。

寝たのが明け方で、起きてきたのは昼頃だった。
今日は授業はない。仕事がないわけではない。
3人揃って食事をしつつ、尋問タイムである。
「なー。未来の俺ってどんな？　お前、逆行してんだろ」
その言葉に、傑は激しく動揺した。
「なっ　なっ　なっ!?」
「隠してるつもりだったのかよ、あれで」
「ふっ　やるじゃないか、悟」
気を取り直した傑は格好つける。つけられてないけど。
「だから、隠してるつもりだったのかよ。今、俺たち初対面なんだからもうちょっと遠慮しろ」
「ウケる」
傑は、それ以上ごまかすつもりはないらしく、簡単に教えてくれた。
「悟は、いい先生だったよ」
「教師？　想像できねーな」
「へー」
「それで最強。反転術式も使えたし、控えめに言って敵なしかな」
「マジで？」
「私は？　私は？」
「もちろん、名医だね」
「お前は？」
「……呪詛師かな」
すいっと目を逸らしていう。
「は？」
「いや、そこは誤魔化しとけよ」
流石に硝子が心配そうにいう。全くだ秘匿死刑になるぞ。
「非術師アレルギーになっちゃったんだよ。今でも、正直人ごみは苦手かな。非術師を守るためにすり潰される、迫害される、それが苦しくなっちゃって。認めるまで随分掛かったけど。もうさ、猿にしか見

えない、猿の言葉が理解できない、嫌悪感がして猿の作ったものが食べられない、着れない、そうなるともう行き着くところまで行くしかないよね。まともな判断力も残ってなかったし」
穏やかに言う。穏やかにいうが、すげー深刻じゃん。
こいつ、あれだけ強いのに精神チワワかよ。
非術師アレルギーってすげー大変じゃん。生きてけねーじゃん。
硝子が頭を撫でると、それをそのまま受け入れる傑。
「だから、そう。私は、今度こそ呪霊にも、非術師にも脅かされない未来が欲しい。さらにいうなら、非術師だってちょっとは苦労を負担してほしい。その為なら、頑張れるつもりだよ。最近、ちょっと迷走してて自分でも何やってるかわかんなくなりつつあったけど……」
「それで、非術師巻き込んで色々やってんのか」
「そう」
「キョーソサマってのは？」
「宗教団体を乗っ取ったんだ。呪霊集めや資金集めの為にね。こう、五条袈裟を着てさ。なんちゃって僧侶？」
「何やってんだよ……。五条袈裟ってもしかして、俺にそれで縋ってるつもりだったのかよ」
「そう、だね。そうなのかもしれない」
「俺、お前が助けてって言っても助けねーほど薄情だったわけ？　同級生だろ」
「私が、その……壊れた時、村一つ皆殺しにしちゃってさ。もう取り返しがつかなくて。それも悪かったんだと思う。罪を認めるんじゃなくて、自分が悪くないって方向に走っちゃって」
多分、話すのすげー辛いと思う。それでも、傑は誠実に話してくれた。
「でも、悟は私を殺してくれたんだ。親友って言ってくれて……」
その笑みに、暗いものはなかった。本当に、俺の与えた死が救いになったのだとわかった。
たまらなくなって、ぎゅっと抱きしめてやった。硝子も頭をなでなでと撫でる。

どうしよう。あって五日も経ってないのに、もう、俺は傑を殺すのが辛くなっている。
それは今の俺自身に対するものではないとわかっていても、傑の俺への信頼は温かく重かった。
守りたいと思う。傑も。硝子も。だって同級生なのだ。
これから、きっと仲良くなっていくのだ。
「またそうなる前に、ちゃんとやばそうだったら助けてって言って俺らの影に隠れとけよ」
柄にもないことを言う。
傑は目を見開く。そして、笑った。
「うん、今度はそうするよ」
「今は、非術師殺しとかしてねーよな？」
「ビジネスパートナーが非術師でね。そこらへん、折り合いはつけてる。……つけてるよ」
折り合い、ついてるわけじゃねーんだな。
強い分、闇落ちされたら厄介だ。これは監視対象だな。
「ネイバー社がなんで術師を募集してんのかと思ったけど。仕事内容普通だったし。まさか、お前の身の回りの世話の為だったりする？」
「それもあるけど、基本、術師の保護が社是だからね。私が保護してる子供達も、虐待されてたんだ」
「呪術界、ただでさえ人いねーんだから人材融通しろよ」
「窓の仕事の手伝いくらいだったら、斡旋できると思うよ。あくまでも本人の意思になるけど。こっちも呪霊の所在地が知りたいし、連携は豚猿に頼んでおくよ」
「豚猿って？」
「私の側近。非術師で、ビジネスパートナー。オタクでパソコンしながら食べてばっかで太ってるどうしようもない奴だけど、有能なんだよね。ネイバー社の実質支配者」
「非術師か……本名何？」
「灯台の里と書いて灯里。向井　灯里」
「ふぅん。そいつも逆行してんの？」

「そう」
「逆行させた奴って誰？　お前の呪霊？」
　言ってて、そう言うパターンもあるかと思って聞いてみる。
　傑はあっさりと言った。
「知らない。豚猿は『何か』様って言ってた。何かの拍子に願ったんだって。ただ、二度目はないんじゃないかな」
「じゃあ、ボーダーについて聞いていい？」
「いいよー。元々、悟と硝子には相談するつもりだったし。六眼だけネックだったから、今まで接触できなかったけど。それについては腹括ったし」
　いいのかよ。
「なんで六眼がネック？」
「私の呪霊操術、未来で呪詛師に奪われるんだ。でも、あると知らないものは襲えないだろう？　だから、できるだけ開示したくなかったんだよ」
「報告しちまっただろうが、先に言えよそう言うことは!!　お前の悪用し放題の術式じゃん!!」
「で、でも、悟がぐれない方が大事だったから」
「そういうことじゃねーんだよ!!」
「そうだ、後で一緒に先生に謝りに行こうね」
「そういうことでもねーんだよ！　笑うな、硝子！」
　ほんと手が掛かるな、こいつ！
「いーからボーダーについて話してよ。動画サイト経営してんだろ。一番お勧めの動画見せて」
「それなら、対産土神戦がいいかな。未来で私の後輩を殺した呪霊だから、だいぶ私怨が入ってるけど」
　ということで、食事も終わったし、パソコンのある傑の部屋に移動する事となったのだった。
　移動の為、すっと腕を解いて俺と硝子が傑から離れると、傑はあからさまに寂しそうな顔をした。
　俺らは五条袈裟じゃねーんだよ。

まーでも、これだけで安心するなら、できるだけ近くにいてやるか。
また非術師虐殺でもされたらたまらない。

## 変わる未来

「うちは、会社であり、未来の情報をお金に換えるネイバーと、呪霊退治系のエンタメをするボーダーに別れててね」
「エンタメ」
「とりあえずは、見てもらおうかな」
傑がカチカチと動画サイトにログインする。ログインＩＤとＰＡＳＳは覚えた。
「部屋でもじっくり見たいから、ＩＤとｐａｓｓ借りていい？」
「私も」
「いいよー。私のＩＤなら、全部の動画が見れるよ。でも、他の人には教えないでね」
「わかった」
労せずしてログイン場所などは向こうでも把握しているだろうし、同じＩＤが使えるなら、俺が調べ倒して報告するまでである。
傑が出してくれた動画では、不良達……だけ、というわけでもないらしい。
とにかく、若き少年少女達が一級の呪霊に襲いかかっていた。
ある程度差異はあるが、基本的に同じ術式に見受けられる。
だが。一つ、重大な点がある。それはカメラに写っているということ。
呪霊も薄ぼんやりと見えているし、なんなんだ一体。
何かを散布しているように見えたが……。
あれはまさか兵器？　技術、なのか!?
攻撃を受けると、どん、どん、と花火のように打ち出されて何処かへと消えていく。
片腕を失ったものもいたが、血も流れず痛がる様子もない。
メンバーは３人、ないし４人組。それが複数。
囮としたりなど、贅沢な人材の使い方をしつつ、戦闘を続けていった。
解説までついてるし、中々ふざけたエンタメだ。

その後は、神社で全員で掃除してお参りして、全員打ち上げられて映像は消えた。
「これ、なんでカメラに写ってんの」
「そうだね……。悟と硝子も打ち上げられてみる？」
「……面白そうじゃん」
「それって大変？」
「いや、ペイルアウトだけなら、ダメージを受けるだけで無条件で出来るよ。受け取りは私がするし、大丈夫。ちょっと準備が必要だけど。あ、ペイルアウトは、ダメージを受けると指定の場所に転送する技術ね。死亡事故防止の為の対策だよ。あまりにも酷いやられ方をしたり、移動を防がれたりするとペイルアウトできないから、絶対ではないけど……今の所、事故はないね。帳とかに触れたりするのは危なそうだから、実験すらもしてないよ」
そして、傑は小さい機械と呪具を出してきた。
「じゃ、いこっか」

グラウンドで、傑は機械を取り出す。
「トリガーオン！」
「おお、呪力と術式が消えた！」
「この状態を、トリオン体という。生身の肉体じゃない、トリオンで出来た体で、トリオンや呪力での攻撃以外はあんまり効きずらい。そもそも怪我してもあんまり痛くない。トリオンと呪力の関係はまだ研究中だけど、トリオン体になると呪力のある体は格納してしまうので、呪霊に対してもあまり攻撃ができなくなる。帷なんてもってのほか」

「意味わかんねーほどすげー技術だけど、意味ねーじゃん。逆に不利だし」
　そう言いつつも、悪用の方法は１００、２００は考えつけそうなすげー技術だ。
「そこで、手は三つある。術師の場合、慣れてくることで、ほら」
　傑の残穢が滲み出てくる。
「これを自染という。体は格納されてるわけだから、そこから呪力を引っ張ってきてトリオン体を加工するイメージかな。トリオンを染めすぎると凶暴になる例があるから、トリガーは3時間以上の起動はシステムで禁じてる。とはいえ、これは自前の呪力を使うんだし、危険度は低いと思われる」
「なるほど」
「次が、装備。呪具などを使うって事だね。これはあまりないけど……確実に安全でもある」
「最後が他染？」
「その通り。呪力球、要は呪力を固めたものを取り込む方法と、私の呪霊を溶かす方法がある」
「呪力を固めるなんて出来んの？」
「まあね。トリガー研究の際にできたんだ。やってみる？」
「やる」
「呪霊カメラで見えてるのなんなの？　トリオンとか、トリガーって何？」
　硝子も質問する。
「トリオンを空気中にばら撒いて呪霊に付与して、トリオンでの攻撃も効いたり見えるようになったりする。視覚支援をすればさらに見えやすくなるかな。トリオンは要するに魔力で、トリガーは魔法の杖」
「は？　傑、魔法使いなの？」
「人間でトリオン持ってない奴はいないよ。非術師だって呪力はあるだろ」
「「は？」」

「もちろん、各々が持つトリオンの強さは千差万別だし、トリガーを起動できるレベルのトリオンを持つ人自体、それほどいないけど。呪力と違うのは、感情由来の力じゃないところ。トリガーの所有が絶対な所かな。年齢が若ければ若いほど伸びが良くて、大人になったら成長が止まる所も違うね。あと、力の性質として物質化が得意」
「俺も持ってるって？」
「うん、そう。でないとペイルアウトしてみるなんて誘わないよ」
「トリガーってどう使うの？」
「これを持って、トリガーオンって言って」
「トリガーオン！」
「トリガーオン！」
「そのトリガーはあげるよ。ついでだし、手合わせしてみる？」
痛みに鈍くなり、身体能力は上がる。なるほど、面白い。
硝子も結構楽しそうに訓練してた。
ただ、呪力を滲み出させる都合上、直接戦うより呪力は確実に減る。
術式まで発動となると、相当練度がないとダメだ。
対呪霊の、攻撃力が極端に減る事を示していた。
その後、傑が何か装置を出して、ペイルアウト実験をした。
なんだかすごく変な感じだった。
「トリガーって量産できんの」
「無理だね。すごく難しい。後は、呪術師は却って戦力が下がるのも問題かな。今、色々研究を頑張っている所。ま、非術師を戦闘に起用出来るだけでも有益かな」
「ふぅん」
「もっかいペイルアウトする」
「後一回だけだからね、硝子」
「半年位して、全員の休暇が揃ったら、チーム戦試してみるかい？　私達はちょうど3人だし。豚猿に支援をさせるよ。トリガーの調節はいつでもしてあげるし。遠距離中距離近距離で仕様が違うからね。それは近距離用」
「する」

「する。とりあえず遠距離用も触ってみたい」
その後、トリガーやトリオンについて詳しく教えてもらった。
そのまま報告にあげたら、案の定トリガーを献上するように言われた。断ったけど。
そうして、情報を収集しつつ、任務をこなして行く日々。
俺達は、とても仲良くなった。
一年が過ぎた頃、護衛任務を受けた。
傑はとても真剣な顔をした。
「どーしたんだよ、傑」
「この任務、失敗するんだ。理子ちゃんは殺される。急ごう。もうすでに追手が来てるはずだ」
「は？」
「傑！　事前に報告しておけ、どういう事だ！」
「今は急いでいるので失礼します」
そして、現場に駆けつけて、落ちる天内を傑が受け止める。
「お主は……」
「理子ちゃん……。私、は……」
見つめ合う二人。恋人同士だったとか？
それぐらい、傑の目はさまざまな感情を含んでいた。
それなら尚更早めに報告しておけよ。
「傑。なんで依頼の失敗したこと言わなかった」
「まだ迷ってるからだよ。この依頼に日本の未来が掛かってて、……それでも、私が理子ちゃんを死なせたくなかったから。助けるって約束したんだ。悟に、任されたんだ。なのに、目の前で、殺されてしまった。甚爾の勧誘にも失敗してるし……」
「お前さ、いい加減にしろよ。いつも風船よりも口軽いじゃん。ちゃんと話さないと、判断もできねー」
「妾も、当事者じゃ。お主、未来を知ると噂の者じゃろう。この依頼に日本の未来がかかっているとはどういう事じゃ」
「それは……任務の途中で言うよ。絶対に」
「任務の途中って」

「学校行って沖縄行った後、帰りの飛行機の中？」
「は？　これだけ未来に干渉してて、未来が動いてねーはずねーだろ。つか沖縄ってなんだ」
「でも、理子ちゃんには最後の思い出になるんだ。これは外せないよ。あと、沖縄は黒井さんが誘拐されたから、今回も誘拐されれば行ける口実はできるよ」
「「沖縄行きは却下で」」
「はあ、仕方ないのう。学校と水族館！　それで妾は十分じゃ！　じゃからそれが終わったら速攻で話すのじゃ」
「わかったよ」
「はあああ!?」
　水族館に行った後。
　傑は自分の術式とそれを悪用する呪詛師の話をして、俺たち3人にフルボッコされた。
　水族館行ってる場合じゃねーだろ！　呪専に急ぐぞ!!
　というかほんと事前に言っとけ、事前に!!
　傑の電話が鳴る。
『教祖様！　本社を襲撃してる人がいて……助けて!!』
　ほらあああああああ!!　未来変わってるじゃねーか!!!

甚爾

「美々子。落ち着いて。豚猿は？」
『働きたくないって言ってる』
「働かせろ。悟。会社の方は大丈夫。理子ちゃんに集中しよう」
「天内、悪い。護衛依頼、絶対成功させねーと」
「元より覚悟の上じゃ。それに、感謝しておる。妾の死は無駄ではないとわかったのだからな。妾を、無駄死にさせないでくれ」
「わかった」
そうして呪専まで急ぐ。
たどり着いたと思った瞬間、背後から悟を刺す者がいた。甚爾だ!!
「トリオン体だっての！」
「だっせ。五条家の坊がそういう手使うか？」
「勝てばいーんだよ、勝てば!!」
悟がすぐに迎撃をする。トリオン体の時は身体能力が上がるし、呪力の強化もこの一年で出来るようになった。何とかこのまま勝って欲しいけど……！
激しい攻撃の応酬。私は入り込めそうにない。
「こっちへ!!」
私は、理子ちゃんを引っ張って避難する。
入口で黒井さんと別れ、地下まで行くとドンっと音がする。
この打ち上げ音はペイルアウトだ。
悟がやられた！
しばらくして、続いてドンっと打ち上げ音。
黒井さんもか！
「急がないと！」
走る。走る。
殺気を感じて、理子ちゃんを抱きしめた。
腕が熱い。撃たれた!!
それでも理子ちゃんは無事だ、良かった。
血がぼたぼたとこぼれ落ちた。甚爾はニヤリと口角を上げる。

「なんだ、トリオン体じゃねーの？」
「君は私を殺せない。呪霊操術が死後どうなるかわからないからね。ならこっちの方が守りやすいだろ？」
「はっ　そーかよ。でもまあ、こっちも都合がいいな」
「理子ちゃん、逃げて！」
「負けるでないぞ！」
　理子ちゃんが走るのを、呪霊を大量に出して守る。
　そして、その背後を塞ぐように現れたのは頼りになる後輩！
「とーじくん、女の子には優しくやで！」
「あん？　お前もいたのか、直哉」
「久々に手合わせしてやぁ！」
　直哉と同時に呪霊を襲わせて仕掛ける。
　直哉はトリオンの扱い上手いし、身内だから説得頑張ってくれそうということで頼んでおいたのだ。

一閃

　ほんっとう強いよな、この猿!!!　ゴリラ！　甚爾！
　呪霊は祓われ、直哉は這いつくばり、私も腕を庇ってしゃがみこんだ状態。
　猿が近づいてきて、自分に深いトラウマがあることを悟る。
　恐怖に耐えきれず、ぎゅっと目を閉じると、即座に気を失わされた。

「あら、目覚めた？」
起きたとき、目の前にいたのは頭に傷のある女性だった。
「お友達はごめんなさいね。殺させて貰ったわ」
理子ちゃん……!!　くそっ　どうして私はいつも無力なんだ。
私は、最強にはなれないのか!?
起き上がると、じゃらりと鎖がなる。
私は当然のごとく拘束されていたのだ。
「貴方には聞きたいことがいっぱいあるの。教えてくださる？」
にこりと笑うその女性の名を、私は知っていた。

# 黒トリガー

「どうしてこう、うまくいかないのよ。作戦くっそボロボロじゃない！」

甚爾を寝返らせる計画は実はかなり初期から頑張っていた。

でも一般企業に裏の人間を雇うすべなんてなかった。

そして今、万一の時にバックアップとして送るはずだった精鋭達は本社防衛に回さざるをえなくなっている。

「働きたくなーい!!」

非戦闘員でいたーい！

だけど、子供達から喝を入れられ、私は仕方なくトリガーオンと叫んだ。

「あいつらぶっ潰すの？」

「ううん。教祖様の応援に行く」

子供達は、不安そうな顔をするがキュッと拳を握る。

「「頑張って!!」」

「何を盗られてもいいから、見つからないようにね」

子供達はこくりと頷く。

窮状に漬け込んでさらに敵が来ないとも限らない。

ありったけの防衛システムを作動させた後、私は、転移システム（ペイルアウトの応用だ）を使い、打ち上げられて教祖様の所へと向かった。

「無事でいなさいよ、理子ちゃん、教祖様！」

衝撃。

私の体は実体化する。空中移動中を、撃ち落とされてしまったようだ。
「ちょうどいいな。ボーナスに変えてやるよ」
「伏黒　甚爾……!!」
私は、実体化すると同時に異形へと姿を変えていく。
これこそが私のサイドエフェクト。トリオンを蜘蛛の形にして実体化させると言うもの。
蜘蛛の足の刃とシューターとしての能力で、物量作戦で行く。
トリオンモンスターに匹敵するトリオン量を、舐めんなよ！
パワーイズ力だ！　呪力とトリオンは厳密に言えば違う。
潤沢なトリオンさえあれば、呪具にも早々負けはしない!!
呪具と私の蜘蛛足がぶつかり合う。
「はっ　やるな！　だが、戦闘経験なら断然俺の方が上だ」
「知ってる」
そもそも私は本能とトリオンゴリ押しなだけの非戦闘員だしな!!
がおー！　くらえ駄々っ子アタック！
足がズンバラリンされ、ぐさっと胴体に呪具が刺さる。
それでも、私は甚爾に縋りついた。
「死ね」
「お前が死ね」
そんな言葉と共に最強様の紫ブッパが炸裂した。
「無事か。傑の知り合い？」
「ネイバーの技術主任兼副社長っす」
「天内は死んだ。そんなに俺が信じられなかったか？」
「っ……後で誹りは受けます」
「傑を狙ってた呪詛師が来てる可能性がある。傑の居場所わかる？」
「こっちです」
それでも、私はこの世界を舐めていた。
原作では、この時点では教祖様は無事だったから。だから無事だろ

うって思ってた。
「あ……ああ……教祖様……傑くん……！」
「傑!!」
ボロボロになってる傑くん。
「困ったね。私とした事が、つい夢中になって時を忘れてしまった」
傑くんの目がなかった。
傑くんの手が。足が。あああああああああ。

「てめー反転術式持ってるからってやりてー放題やってんじゃねーぞ」
それは、私を突き動かす衝動だった。あるいは、考えなしの軽挙妄動だった。
「傑くん!!」
それでも、私は、後悔しない。いや、嘘ですめっっちゃ後悔します。傑くん、後で助ける方法探してお願いマジでマジでマジで。
ともかく、私は。
傑くんに飛びついて、ブラックトリガーになった。
ワールドトリガーの主人公の父みたく、トリオンで体を作って教祖様を保護したのだった。

## 元鞘（最終回）

天内　理子　死亡。
伏黒　甚爾　死亡。
禪院　直哉　重症。
五条　悟　覚醒。
伏黒　恵、津美紀、禪院家行き。
ネイバー社、強盗多数により被害甚大。副社長行方不明。
そして私、夏油　傑。
悟に治療されて、無傷だったりする。
悟、反転術式他者にも出来るようになっちゃったんだよね。凄すぎ。
これは……豚猿、いや、灯里に申し訳ない……えっ灯里無駄死……ブンブンと首を振る。
メロンパン倒せたし！　これが一番のネックだったから、これさえ解決したら大丈夫だよね！
私は現在、理子ちゃんの護衛失敗の未来を言わなかったことで凄く尋問されている。
どさくさに紛れて、関係ないことまでキリキリ絞られてる。
とりあえず、豚猿がいないので、子供達を呼び寄せたのだけど。
豚猿がいないので、大人達の手に寄り光の速さでネイバー社が乗っ取られてしまった。
とりあえず、技術情報やトリガーは守り切れたけど、技術については豚猿がメインだったんだよね。
私は得意ではないので、灯里を救い出す方法も、どちらにしろ技術者を見つけて委託するしかないという。
まさかバックアップの豚猿が死ぬ（ブラックトリガーになる）とは思わなかったから、遺書を用意してたの、私だけなんだよなぁ。
どうしてこうなった。
悟に言わせれば、なるべくしてなった必然の帰結だバーカ！　だそうだが。

キュッと黒トリガーを握る。
なんだかんだ言って、いつでもこうしようぜ！　と方針を示してくれた豚猿がいないのが辛い。迷走してたけど、それでもどこかには足を進めていたのだ。
上層部には、トリガーの知識を渡して呪術師になるように圧力を掛けられている。
でも私は、またすり潰されるようなことにはなりたくない。
私がしっかりしないと。
私が子供達を守らないと。
私が……

「くぅーず。差し入れ持ってきたぞ。喉乾いたろ」
「チョコもあるぜ」
「ボーダーの近況も聞いてきたで。直哉様って言うんやな」
「硝子……悟。また説得に来たのかい？　直哉も」
「俺は傑と将来仕事したいしな」
「トリオンは医療に役立ちそうだし、技術情報よこせ。対価としてスポドリをやる」
「対価安っ」
「いらないの？」
硝子がスポーツドリンクを揺らす。
「……いる。その代わり、黒トリガーを人に戻す研究もしてほしい」
「心得た」
「ボーダー達はもう、呪術師として引き込むわ。今、メガネ型の呪具を量産しとるとこや。トリオンを利用すれば効率的に呪力を利用できるし。後は教祖様のゴーサインだけや」
「でも、本格的にこっちの世界にくれば、命の保証はないよ」
「その世界に引き込んだのがあんたやろ。責任もてや」
やったの豚猿だけど。そうだね。そうだ。
「傑。あのさ。二番煎じとかすげー嫌いなんだけどさ。それでも、傑の話してくれたかつての俺と同じように傑と一緒に最強やりたい。

非術師が怖いなら、俺が非術師から守ってやるよ。だから……駄目か？」
「守られる最強がいるかよ」
「でも、傑は実際守られてるし、最強じゃねーか」
そして、黒トリガーを指差される。
「非術師が全部クソなんかじゃないって、知ってるだろ。傑」
「まあね。でも、いいのかい？　私は元呪詛師だよ？」
「今世では違うじゃねーか。それに、俺が殴ってでも止めるし」
「そっか。そうだね」
私は、３人の伸ばした手をとり、呪専にちゃんと所属する事になった。
ボーダー達は「花火」と呼ばれて活動することになった。
もうメロンパンはいないから、悟は命を狙われないし、私も生きてていいんだ。
だから、もう一度、友人達と頑張ってみよう。
そして、１０年後。私は、上層部から秘密裏に任務を言い渡された。
「そろそろ天元様も進化したろう。天元様に呪霊操術を使え」
「呪術師やめます」

やっぱり呪術界は糞である。

※この後腐ったミカンは最強様がこんがり料理しました。

## トリオン??モンスター

謎の空間の亀裂から出てきた化け物。
それは、呪力による攻撃が効きにくかった。
呪霊じゃない化け物？　そんなものがいるわけがない。
でも、実際その訳のわからないものに、僕は追い詰められていた。
鬼と、呪霊に限りなく近い巨大な化け物。僕はここで終わる？　馬鹿な。
「妙な技を使う。ふむ……お前も神としての才能は十分だな。お前でもいいか」
「ざっけんなよ！」
化け物を貫く何か。
声がした方を見ると、怒れる鬼女がそこにいた。
「ふん。戻る気になったか」
「だーれが戻るか！　この誘拐犯！　強盗殺人犯！　侵略者！　私の心はいつだってボーダーと共にあるわ！」
女は四角い箱のようなものを手の内に、そして周囲に作り出して撃ち出す。
「巻き込んでごめん。大丈夫だからね。怖くないよ。私が守るから、少しだけ我慢しててね」
気遣う言葉を鬼女が掛けてくる。仲間割れだろうか。でも僕は怖がってなんかない。
激しい撃ち合い。
やはり呪力は感じない。
僕の盾になりつつ戦う所は、本当に僕を守る気でいるらしい。
最後に、鬼女が相手の角をへし折ると、トドメを刺した。
ーーこいつ、呪霊じゃない。殺しても死体が残っているから。
この人、鬼？　を殺した。
荒事に慣れてはいるし、あの鬼は呪詛師？　だと思うし、いずれは僕も呪詛師も殺したりするのだろうが、僕はまだ人を殺したことがなかった。

鬼女は僕を振り返って、僕は身構える。
「ごめん。怖いよね」
「は？　誰が怖がってるって？」
「ちょっと携帯を貸して欲しくて……お願い！　家に連絡したいの」
「構わないよ。全然怖くないしね。家？」
携帯を貸すと、電話をする。
しばらくして、戸惑い出した。番号を間違えたらしい。
「ごめん、ちょっとネットもさせて」
操作をして、鬼女は絶望した。
「嘘、嘘。ない。本部がない!!　並行世界に飛んだ!?　嘘でしょ!?」
「並行世界？」
「最悪……下手するとこの世界もターゲットに。その前にこの少年か」
鬼女は、告げた。
「あのね。君は、これから、この鬼みたいな人とか、怖い化け物に襲われることになると思う」
「怖くないが？」
「そんな時は、これを使って」
鬼女が少し悩んで渡したのは、四角い機械だった。三つ。
「これを持って、トリガーオンと言って」
「トリガーオン……？　ッ!!」
その途端、僕は変身した。見た目は変わらないけど、確かに変身して服装も変わった。
「トリオン体はトリオンでしか傷つけられない……って事はないけど、トリオン以外は効きが悪いわ。襲われたら、これを使って逃げなさい。使い方を教えるわね。一応、攻撃方法も教えるけど、最終手段と思って。訓練はしておくこと。あっ　悪用は駄目だからね！　遠距離攻撃の方が安心だけど、それはセンスいるし君って不良っぽいから、一応近接武器も渡しておくよ。でも、基本は逃げること！」
「貰えるなら、もらうけど。君達は一体？」
「奴らは異世界人の侵略者よ。トリオンの多い人間を捕まえて、生贄

にしたり兵士に仕立て上げたり、体の一部を抉って捨てたりする悪い人たち。だから絶対捕まってはダメよ？」
「……それは大事なのでは？」
「大丈夫、怖くない「怖いとは言ってない！」それをなんとかするために私達が……ボーダーがいるから。そのトリガー、本当に自衛以外につかわないでね？　本来は外部に流したら駄目だし、見られたら記憶を封じなきゃいけないの。でも、君みたいに神クラスのトリオンの持ち主だと、どうしたって狙われるから。じゃあ、簡単に教えましょうか」
「神クラスって？」
「人柱よ。星に捧げて、寿命が尽きるまで燃料にするの」
「それは嫌だな」
「でしょ。大丈夫。私達がいつか、あいつら皆やっつけるから」
それをなんとかする為の私達。なるほど、この前スカウトしてきた呪術師と同じか。
なるほど、人知れず人守る組織は多いらしい。
スカウトされるの多いな。さすが僕！　微妙に嬉しくないけど。
簡単にトリガーの説明をした後、彼女は亀裂に向かう。
「待って！」
「何？」
「名前、まだ聞いてない」
「トリオンモンスター」
「名前じゃないじゃん……」
「ヒーローは本名を隠すものなのよ」
トリオンモンスターはニカっと笑う。
その笑顔は、今も私の胸に焼き付いてる。
これが、私の初恋。

## トリオン??モンスター2

「呪力を感じない化け物ー？　なんだそれ。エイリアンとでも言うつもりかよ」
「とにかく、そういうものが目撃されているから、見たら報告するように」
そう、夜蛾先生から注意喚起があった。
地球侵略はまだ続いているらしい。
トリオンモンスターは大丈夫だろうか。自分で自分をモンスターと自称するぐらいだから、大丈夫だと思いたい。
緊急ということで、任務に急行する。
そこでは、あの化け物が人々を襲っていた。
「おいおい、なんだよあれ」
そして、いた。
トリオンモンスター。
「ブッコロー！」
一層凶悪な顔になって、化け物をぶった斬る。
助けは必要なさそうだ。それより、大量の呪霊が纏わりついている。
これは祓っておくべきだろう。
「おい。傑！」
「呪霊が憑いてるから、祓わないと」
「真面目か！」
駆け寄って、呪霊を祓う。
「体が楽になった……？　いや、そんな事より、逃げとけ邪魔よ」
非術師なんだ。
そう思いながら、言われた通り引っ込む。
以前より粗野になっている。機嫌が悪そうだ。
「お前、なんなの？」
「悟。行こう。邪魔をしてはいけない」
「邪魔をしてはいけないって」

「これは呪霊じゃないよ。私達の専門外だ」
「そうだけどよ」
私が悟を連れて引っ込むと、化け物が彼女に言った。
「そのまま治療を受けねば死ぬぞ」
「わかってんのよ、そんな事は！　テメェの尻はテメェで拭くわ、心配ご無用！」
その言葉に、私は動揺する。
彼女は、銃をぶっ放し、化け物を倒して次元に穴をあけて消えてしまった。
それから、たまに任務で遭遇するようになった。
彼女は、どんどん凶悪になっていった。
理子ちゃんが死んで。
灰原が死んで。
ボロボロになった時に、双子の幼女を見つけて。
今まさに殺戮をしようとする時、ゲートが開いて化け物に襲われた。
私は、双子を守る。
双子だけを守る。シールドで、双子達を庇って。村人達が殺戮されていって。
そして、彼女が現れた。
「がああああああ!!!」
ほとんど理性を失った状態で。
化け物を倒した後、彼女は私を睨んだ。
「トリオンモンスター」
「私は！　私は!!　……私はモンスターなんかじゃない!!!」
「君が名乗ったんだろう」
「……!!　そう、そうだ。あ……」
彼女はそこで散らばる死体に気づき、表情を暗くした。
私は、とりあえず彼女についた呪霊を祓った。
非術師は殺す。そうだ、見殺しにする。彼女も？　……命を削って人々を守る彼女まで？

「もう、ダメかもね。とっくの昔に詰んではいるんだけど」
そこで、彼女のお腹がなる。
「何か、食べ物を探してこようか」
「助かる」
それから、私は食べ物を用意して四人で食べた。
彼女はしばし無言で食事を貪る。痩せていることに気づいた。まともに食べているのだろうか。
「あなたの名前を聞いてもいいですか？」
「トリオンモンスター」
「モンスターって呼ぶなって」
「いいのよ。モンスターだから」
そして、彼女は身の上話をしてくれた。
幼い頃にさらわれた事。人体実験。角型トリガーに脳を侵食されて凶暴化していて、余命が幾ばくもない事。
ボーダーと言われる地球の対ネイバー組織と合流するところだったこと。失敗して並行世界に来てしまったこと。
それからずっとこの世界を守っていること。
「なんで、そうまでして人々を守るんですか」
そもそもボランティアだったことに驚く。
呪術師だってお金は貰っている。
「世の中、そんなもんでしょ。誰かがやらなくちゃいけなくて、それが私だったってだけ。私の場合は、私のせいでこの世界が知られちゃった事もあるしね。あなただって、大人になればわかるわ」
「私は……私は！　そうは思えない!!」
「優しいのね。今も、怖いのにこうして、食事を用意してくれたでしょ。皆様のご厚意で、私は今日も生きています」
「怖くなんかない、私は、ただ……!!」
今度は、私が呪術師のことを話した。
溜まっていたものを全て吐き出して、私は抱きしめられていた。
「がんばったね。偉い偉い。うん。よし。……君に会えてよかった。もう凄く辛い思いをしている君に、これを頼むのは酷だと思うけど

……私の知識と力、そして人脈。引き継いでほしい」
「え……」
「これから私、ツノを切り取って、ブラックトリガーを作るわ」
「ブラックトリガーになるって、死ぬってことですか」
「どうせ死ぬし、角に人格データがコピーされてるから、それをトリオン兵に組み込めばあなたへの助言もできるわ。ずっと前にそうすべきだったけど、今、ようやく勇気が出た」
「待ってください。呪いだけで手いっぱいなのに、異世界からの侵略者なんて……」
「だからよ。荒事になれてる貴方は、きっといい指導者になる。それでね。地球を守りつつ、ブラックトリガーから、人に戻す研究をして欲しいの」
「でも……!!」
「呪術師だけが頑張ってるんじゃないって知ってほしい。世界は理不尽なことばっかりだけど、優しい人もちゃんといるよ」
「頼むよ」
「卑怯です。……引き換え条件があります。名前は？」
「渡　灯里」
そして、ブラックトリガーが転がった。小さなトリオン兵がツノを食べる。
私は、涙を拭った。
「私は、貴女みたいに優しくなれない。だから、手段なんて選びませんから」
「悪りぃな。そうだ。お前の名前は？」
私はキョトンとする。
そうだ。そういえば、名前を教えてなかったのは私もか。
「夏油。夏油　傑。いや。2代目トリオンモンスターです」
ごめんね、悟。硝子。さよなら。

# トリオン??モンスター3

「傑が通称エイリアンにやられた」
「は？」
その知らせを聞いた時、頭が真っ白になった。
「殺されたか、誘拐されたか……任務先で戦闘の跡があったらしい」
「は、傑がやられるわけがねーだろ」
「悟……事実だ。エイリアンには呪術や兵器が聞きにくい事が確認されていて……」
「任務地は!!」
俺は任務地に急行した。
濃密な血の匂いが残る。
少しだけ、傑の残穢が残っていた。確かに、傑はここにいた。
傑の携帯電話が落ちているのが見つかって、俺はそれを拾い上げた。
嘘だ。
いやあいつはしぶといから。
だから、生きてる。きっと生きてる。
エイリアン達を締め上げて、あいつの居場所を吐き出させてやる。
多少は話が出来そうだったトリオンモンスターを捕まえるのでもいい。
あいつらは見えるし異形だしでかいから、とにかく目立つ。
網を張ってれば絶対に気づく。
そして現場に急行して。
俺は、信じがたい物を見た。

僧衣を着て、無数の四角いエネルギー体を従えた、なんでも知っていると思っていた親友が。

「傑!!」
「誰かな、それは。私はトリオンモンスターだ」
そして、傑は幾つもの四角い銃弾を、エイリアンにぶっ放した。
「なにをふざけてるんだよ!」
「諦めな。こいつはもうテメェの傑じゃなくて、私のトリオンモンスターなんだよ」
小さい化け物が傑に寄り添っている。
「避難していてくれないかな。トリオン兵にはトリオンしか効かない」
そして、傑は俺から目を逸らした。
化け物を倒したあと、傑は空間に穴を開けて消えてしまった。
傑の扱いは紛糾した。
呪専から出たのは確かだが、洗脳されている可能性が大きい。
何より、呪力で一般人を傷つけているわけではない（はずだ）。
やっていることは、未知の力、トリオン？　を使ってのエイリアンとの撃ち合いだけである。
エイリアンの扱いについても紛糾した。
エイリアンに呪力は効きづらい事が判明している。
そもそも、呪霊ではないのだから、呪術師の守備範囲ではないのかという意見だ。
悔しいが、その通りだと思う。エイリアンなんて、傑が関わってなきゃ知った事じゃない。
ただでさえ、呪術師は人手不足。
ただ、日本で荒事に対応できる人材というと、やはり呪術師にお鉢が回ってくる。
兵器だって効かないのだし。いや、呪術も効かないのだが。
結局粘り強い調査をする事となり、傑が宗教団体を乗っ取っている事がわかった。
怪しげな「修行」「選抜」「資金集め」「呪い集め」「研究」。
特に、選ばれし子供に訓練をつけてトリオンモンスターに仕立て上げているのが問題となった。

しかし、呪力と同じく、早くからトリオンにはトリオンしか通用しない事が明らかになりつつあった。
そんなエイリアンとの殺し合いと防衛を買って出る組織に、必要悪として見逃す空気が形成されつつあった。
そんな中、禪院家の真希と真依が宗教団体に結果的に潜入成功。
ネイバーという侵略者に対する組織という事が明らかとなる。
傑が非道な報復作戦に従事させられている事も判明。
国に申告しろ。侵略に個人で対応するな。
後、真希はノリノリで組織の乗っ取りを宣言するな潜入者が目立つな。
それはそれとして、ネイバーへの対策は必須だがそれは呪術師じゃなくてもできるのと呪術師は未曾有の人手不足なので、夏油傑の洗脳解除と返還を粘り強く求めていく事になったのだった。
そして、こう着状態となり、時は流れ１０年後。
唐突に、呪術界に宗教団体から連絡が来た。
「傑と宿儺の器をトレードしたい」
どこまで傑を馬鹿にすれば済むのかな、エイリアンは。悠仁だって、可愛い生徒をはいそうですかと渡せるわけがない。
そもそも、呪術界は人手不足なんだ頼むからそこから人材をスカウトするな。

# トリオン??モンスター４

「潜入？」
「そうだ。やってみるか？」
「なんで私なんだ？」
「相手は対エイリアン組織だ」
その言葉に、真希は納得した。兵器も呪力も通用しない、判断に困る存在。
そして、それに対抗する妙な四角い物体を操る怪しい宗教団体。
「行く」
「あたしも行く!!」
真依が転がり込んできて、双子は二人、熱心な信者を偽装した偽の両親に連れられ、宗教団体の本拠地を訪ねた。
集められた子供達は「祈りの儀式」で選別されていく。
真希と真依は無事選ばれ、ほっとした。
選ばれた子供達は、ペーパーテストを受けて、反射神経などのいくつかのテストを受けた。
そして、それを渡された。
「トリガーオンと言ってください」
「トリガーオン！」
それで、体の全てが切り替わった感覚がした。
「では、ソードを出してください。こうします」
高校生くらいの子が光る刃を出す。
いきなりスパルタだなと思いながらも、真希は試してみる。出来た。
高揚することは避けられなかった。
シンプルに凄い。
それから、カカシにその刃で切り掛かった。
「では、変身を解除してください。次はこのトリガーを使ってください」
テレビで教祖夏油がやっていたような、キューブを打ち出す事も、

銃を撃つのもやった。
その後、トリガーを近、中、遠の中から選ぶ。
それから、トリガーをオンにした状態で教祖夏油に面通しされた。
五条袈裟を纏い、子供達と小さなエイリアンを侍らせ、こちらを見下す教祖。
真依の怯えと様子から、それぞれに呪霊が付けられた事を知る。
「思ったよりも集まったね。君達の道は三つ。研究者になるか、兵士になるか、ただトリオンを絞り出される燃料となるか。君ら猿が役立つことを願っているよ。それでは、最終試験だ。戦闘時間は１００分。１分生き延びれば１点だ。点の高いものからご褒美をくれてやる」
「生存点、撃破点、私と２代目トリオンモンスターの付与する点数。この合計で成績が決まるぜ！　じゃあ、開始だ！」
教祖様と荒い口調のエイリアン（女の声だった）の言葉。
咄嗟に真依の手を握る。
その後、景色が変わった。
街中だ。
エイリアンが何体も浮遊している。エイリアンには数字が書かれていた。
「いやあああああ！」
大きなエイリアンに中学生くらいの子が特攻かましてすぐに倒され、光となってドンッとどこかに移動する。
『意気や良し!!　初特攻ということで３０点あげるわ！　でも実戦でそれやったら死ぬからね！』
「マジかよ。スパルタだな。まあ死にはしねぇだろ」
「おねぇちゃん……」
「真依。一位狙うぞ。真依の力が必要だ」
「う、うん」
二人は手に手を取って、小さなエイリアンを探して狩り始めた。
１００分あればトリガーの使い方も習熟し、徐々に大物を狙えるようになってくる。

最後には、同じく潜入していた政府関係の子息と協力して大物をジャイアントキリングできた。
高校生を押し退けて小学校に通ってもいない年齢の真希と真依が上位に君臨したのはさすがと言えよう。
この１００分が終わる頃には、真希はすっかりこの組織で成り上がる決意を固めていた（一度目）。
そして、テストが終わって歓迎会のご馳走を食べてぐっすり寝て、翌日。
ネイバーについての簡単な説明を受けた。
マザートリガーを使った星に住まう惑星国家。その為常にトリオンを求め、他国に侵略を仕掛けている。
つまりは侵略者なのだ。
トリオンに対抗できるのはトリオンだけ。
だから、トリオンの持ち主を集め、防衛組織を立ち上げた。
……私も、戦えるんだ。世の中の為に戦えるんだ。真希はこの組織で成り上がる決意を固めた（二度目）。
その後、隙を見て電話で報告すると、五条家に貸しができたと当主様から褒められた。
五条家次期当主直々に親友のことを頼むと手紙でお願いされてしまった。
真希はこの組織で成り上がる決意を固めた（三度目）。
そして、一年ほどして実戦に出る事となった。
初めての実戦には、直哉が出張っていた。
「なんや、一年ぶりやな」
「直哉。これエイリアン案件だぞ」
「知ってる。エイリアン見とこうと思ったんや」
「呪力効かねーぞ。直哉は避難してろよ」
「あ〝？　ぶっ飛ばすで」
「仕事の後にしてくれ」
エイリアンが現れる。
真希は一緒に来たメンバーと共にエイリアンに向けてアステロイ

ド（通常弾）を撃った。
真希としては近接が好きなのだが、流石に小さい内は素直に遠距離攻撃に頼った方がいい。
ちなみに真依はオペレーターを目指しているが、やっぱり勉強が終わるまではシューターだ。
銃撃の嵐にエイリアンは沈黙。
真希は直哉に向き合った。
「面白いな。トリガーいうんやろそれ。貸してや」
「貸すわけねーだろ」
「じゃあ、勝ったら貸してや」
いきなり仕掛けてくる直哉に、真希は応戦する。
そして、いきなり直哉が倒れた。
「おねぇちゃん、さっさと帰りましょ」
「そうしましょう、真希さん。早く帰らないと初代トリオンモンスターが心配します」
「おう」
真希が引き付け、真依が隠密攻撃で倒す。コンビネーション攻撃は完璧である。
痺れた体で呼び止めてくる直哉を一度だけ振り返って転移ゲートに入る。
今はもう、真希は孤独ではない。仲間がいて、仲間と共に戦って、誰に恥じる事もない。
倒れた直哉を嗤って、真希は成り上がる決意をした（四度目）。

そして、少しずつ成り上がって、情報を得られる立場になって。
真希は、見てしまった。
血ぬれた様子でマザートリガーを含むトリガーの山を持ってくる、夏油を。
「大量じゃねーか」
「ああ、星を落としてきたからね」
「星、を？」

「警告しても侵略をやめないから、仕方ないよね」
「仕方、ないって……まさか。呪術を非術師に使ったのか？」
「使えるものはなんでも使うさ」
「そんな……星には一般人も住んでんだろ」
「猿の侵略者がどうなろうと関係ないよ」
「そんなわけあるか!!」
「黙れ。この組織の長は私だ」
真希は絶句する。この時初めて、真希は夏油が狂っていた事を直視する。
……私が止めないと。
真希は五度目の決意をする。そして、思いのままに宣言した。
「なら、私がこの組織を乗っ取って長になってやるよ」
「ふん、やってみるんだね」
この後、真希は野心を隠さず一層精力的に活動するようになる。

# トリオン??モンスター5

私は、非術師が、いいや、世の中の何かが憎かった。
そして、そのぶつけ先を探していただけのように思う。
見事に振り上げた拳はネイバーに誘導され、戸惑うところは多分にある。
非術師だって、トリオンがあるならネイバー相手に命懸けで戦ってくれる。
人は、力があれば頑張ってそれを世の為人の為に使ってくれるものなのだ。
そして、高出力のトリオン持ち以外の者も懸命に資金集めなど手伝ってくれていた。
私は今も戸惑っている。
それでも。それでも、猿は猿にしか見えない。
ぎゅっと、唯一拒否反応の出ないガラクタ（灯里の心をインストールしたトリオン兵）を抱きしめた。

星一つ落とすのは疲れる。
それでも、次から次へと侵略惑星が現れるのだから仕方がない。
星を順番に落としていけば警戒して手出しをしなくなるかと思ったが、同盟を組んでまでこちらに対応してくるのだから困ったものだ。

「逃げろ！　こっちだ!!」
的確に見えないはずの呪霊から民を逃す兵士たち。
「ふむ。対応してきたね。位置ぐらいは把握できるようになってきたか」
呪霊は呪力以外では死なないが、術者は容易く死ぬ。暴力でもトリ

オンでも、もちろん呪力でも。
だから夏油はシールドと透過で身を守り、ただ、皆殺しになるのを待っている。
それでも、その時間はだんだんと伸びている。
その為夏油は少し期待していた。
このまま、トリオン技術が発達していけば、トリオンで呪霊を倒せるようになるかもしれない。
それをそのままいただく事ができたなら、呪術師だけが死なずにすむ。
そうだ。そうして初めて、こちらの収支は帳尻が合うというものだ。
そして、どうやら待ち続けていた日は、今日だったらしい。
「！　呪霊が祓われていく。いや、呪術師が誘拐された可能性もあるか」
逃げていた兵達が反転する。
「もう怯える日々は終わりだ！　死ね！　トリオンモンスター！」
「死なせるなよ！　生かして捉えろとのご命令だ」
「わかってる！」
呪力をかき乱す特殊なトリオンが、夏油を襲った。
呪力が練れない。そればかりか、トリオンも呪霊も拡散して襲いくる弾丸が夏油を貫いた。
夏油は小さなトリオン兵を逃すと笑った。本当に嬉しそうに。
元から、夏油はいない方がいいのだ。
その手は血に汚れすぎていて、歩み寄るには夏油の存在が邪魔となる。
そして、夏油がおらずとも十分に戦って行ける事を夏油は知っている。
夏油がいない方がより良い未来が紡げるのを知っている。
だから、夏油がいなくなることに問題はない。今、夏油は役目を果たしたのだ。

ああ、ようやく頑張るのをやめられる。
傷ついた夏油を、麻痺弾が襲った。

# トリオン⁇モンスター6

「は？」
　悟の怒りが篭りに篭ったその言葉に、伊地知はヒッと身を竦ませた。
「つまり、悠仁を渡して、傑は自分達で取りに行けって事？　それも、悠仁には傑と同じように星落としをさせると？　舐めてんの？」
「そうだ」
「素直に傑を助けてくださいお願いしますって言えないの？」
「ああ？　散々星落としてきた奴を受け入れられるわけがねーだろ。奴がいると和解ができねー。ここで切り捨てた方が組織の為になんだよ」
「でも悠仁には星落としさせるんだよね？」
「そこまではさせねぇ。だが、相手の新兵器が通じねぇよってアピールが必要だ。だから、夏油を奪還したらテメェらに売り飛ばす」
「……」
「ヒィィっ」
　怒りで言葉の代わりに呪力が吹き出した五条。それは、灯里に取り憑いていた呪霊が余波で消滅するほど。
　だが、トリオン兵である灯里には見えないので無視する。代わりに伊地知が怯えているので、恐らく凄いことになってるんだろうな、と予測はつくが。
「お前さ、傑の事、どう思ってんの？」
「角の攻撃衝動に浸されきった私以上に壊れた人形」
　ついに手が出た。
　灯里を真希が庇い、貫かれる。
　貫かれたまま、真希は頭を地につけた。
「次期教祖候補としてお願いします。どうか、前教祖を助けてください」
「お姉ちゃん!!」
「大丈夫だ、真依。トリオン体だ」

そうはいっても、ひどい様子でトリオンが漏れているのが分かる。
「同じく、次期教祖候補としてお願いします。全ての技術情報の提供の準備は出来ております。相手のトリオン技術も必ずや解析して、提供いたします。それで呪術師以外も戦えるようになるはずです」
「傑は！　お前だけは信じてたんだよ！　傑を裏切るのか、初代トリオンモンスター！」
「しょうがねーだろ！　あいつは周囲を巻き込んで死に向かって走り続けてきた、止めるのは並大抵の事じゃ無理だ!!」
「!!」
「血に汚れきったあいつには、生きる理由が必要だ。対外的にも、あいつ自身にも。今回のは良いきっかけだ。宿儺も、好きあらば暴れたがってるんだろ。いいぜ。好きなだけ暴れろよ。和平はその後「あのさ、もう黙っててくれよ」「我が組織は創設者とはいえ残滓なんかを頭に置くつもりはありません。これは総意です」」
言われて、渋々灯里は黙る。
「傑は、非術師を猿って呼んで毛嫌いしてた。そして、そんな自分の事も嫌ってて、苦しんでた。傑に必要なのは生きてて良いって許しじゃない。傑自体が認めてないし、傑は血を流しすぎた。だから、そちらに預けたいってのは、私達の意志でもある。ずっと止めたかった。こうなるまで止められなかった。けれど、最初で最後の切っ掛けをもらえたから、今回で意地でも止める」
「政府としても、今のままでは受け入れる事はできません。傑さんには消えてもらわなくてはならないし、しかし侵略を防ぎ続けた功労者を見捨てるのはそれはそれで触りがあるのです。向こうに利用されても困りますし。全ての情報を提供することはもちろん、奪還にも人を出させていただきます。大きな貸しを我が団体と政府に一つずつ作ったと考えていただいてもいい。宿儺の秘匿死刑の猶予、一回までの暴走に対する免罪をお約束します。どうか」
「一つ条件がある」
「お聞きします」
「お前ら全員、生身で一発ずつ殴らせろ。それと、悠仁の派遣について

は本人の意思を尊重させてもらう」

そして、呪術界とボーダーは手を組むこととなった。

悠仁は、困った顔で手を振った。

「俺、例え侵略者相手でも殺すの嫌なんですけど」

「だよね。ただ、受けても君にデメリットはないと思う。執行猶予が政府のお墨付きでつくし」

「可能なんですか」

懐疑的に伏黒が聞く。

「いやー。悠仁の所持トリオン、凄いらしいんだよね。3代目トリオンモンスターを名乗れるほど。で。その大量のトリオンを使ってやりたい事があるらしい。そのプロジェクトが終わるまで無事だよ」

「プロジェクト？」

「星。日本も欲しいらしい」

「あんた、宇宙にいくわけ？」

流石に野薔薇が目を丸くして聞いた。

「似たようなものかな。まー、縛りを結ぶわけでもないし、いつでも呪術界に逃げ帰って大丈夫。それでも契約は守らせるし。流石に傑の奪還には参加することになるけど、それは僕が守るから」

「いーの？　それで」

「まあね。傑の引き取りに付随する諸問題を考えれば、それぐらいは

余裕で許されるよ。宿儺に関しては、僕が向こうの秘密兵器を破壊するのでも問題ない事だしね」
「人を殺さなくて良いなら、やってみます」
「正直、侵略者も侵略者皆殺しマンも関わりたくないですが、虎杖が行くなら俺も行きます」
「ちょっと私を置いていく気？　意地でもついてくからね！」
「ありがとう。僕が君たちを守るから、大船に乗ったつもりでいなさい！　あっ　向こうでは人は極力殺さないで、傑の奪還だけするから。そのためにトリガーも借りてきたし、一ヶ月で使いこなして救出に向かうよ」
「門外不出のはずでは？」
「この後に及んでそんなの許すはずないでしょ。トリガーの貸与はこれから呪術界に継続的にされる事になる。流石にトリオン最低値以上の術師に限定されるけどね。恵も野薔薇も規定値余裕でオーバーだよ。呪術師ほど珍しい人種じゃないしね。トリオン値高い人」
「先生、一ヶ月も良いのか？」
「準備は欠かせないからね。……大丈夫。傑は待ってくれるよ」
「……俺、頑張る」
「そういう事なら、時間は無駄にはできないな」
「今日中に最低限の使い方を覚えるわよ！」
「「「おー！」」」
「3人とも、ありがとう」
「貴様ら、俺様がそんな訳のわからぬ存在の言うままに力を振るうと本当に思っておるのか。おめでたいな」
「でもたまには暴れたいでしょ？」
「ドン引きするほど暴れてやるわ」
「それは傑がやってるんだよなぁ」
「できれば死人はなしでお願いシャス！」
「本当にふざけるなよお前ら」
　宿儺がプンスコする横で、恵と野薔薇はせっせと色々なトリガーを試していた。

# トリオン☆モンスター　いふ！前編

「呪力を感じない化け物ー？　なんだそれ。エイリアンとでも言うつもりかよ」
「とにかく、そういうものが目撃されているから、見たら報告するように」
そう、夜蛾先生から注意喚起があった。
地球侵略はまだ続いているらしい。
トリオンモンスターは大丈夫だろうか。自分で自分をモンスターと自称するぐらいだから、大丈夫だと思いたい。
緊急ということで、任務に急行する。
そこでは、あの化け物が人々を襲っていた。
「おいおい、なんだよあれ」
そして、いた。
トリオンモンスター。
「ブッコロー！」
一層凶悪な顔になって、化け物をぶった斬る。
助けは必要なさそうだ。それより、大量の呪霊が纏わりついている。
これは祓っておくべきだろう。
「おい。傑！」
「呪霊が憑いてるから、祓わないと」
「真面目か！」
駆け寄って、呪霊を祓う。
「体が楽になった……？　いや、そんな事より、逃げとけ邪魔よ」
非術師なんだ。
そう思いながら、言われた通り引っ込む。
以前より粗野になっている。機嫌が悪そうだ。
「お前、なんなの？」
「悟。行こう。邪魔をしてはいけない」
「邪魔をしてはいけないって」

「これは呪霊じゃないよ。私達の専門外だ」
「そうだけどよ」
私が悟を連れて引っ込むと、化け物が彼女に言った。
「そのまま治療を受けねば死ぬぞ」
「わかってんのよ、そんな事は！　テメェの尻はテメェで拭くわ、心配ご無用！」
その言葉に、私は動揺する。
彼女は、銃をぶっ放し、化け物を倒して次元に穴をあけて消えてしまった。
それから、たまに任務で遭遇するようになった。
二人きりで話せたら良いのだけれど。治療しないと死んでしまうとはどういう事だろう。

任務で戦っている時、またあいつらが現れた。
「ようやく見つけたぜ、黄金の雛鳥」
「黄金の雛鳥ぃ？　なんだよそれ」
「隣の男もトリオンはあるようだな。二人とも捕まえる」
「だから、なんだよトリオン!!」
「悟、彼女が現れるまで時間を稼げるかな」
「ああ？　倒しちゃって良いだろあんなん」
「でも彼らは非術師じゃないかな」
「真面目か!!　いやそれ、言ってる場合か!?　今のところ呪霊枠じゃねーの」
「一応、確認した方がいいよ」
そして、私は悟の手を引いて逃げる。
すぐに大量の呪霊の取り憑いたトリオンモンスターが現れた。
「ざけんじゃねぇぞ!!」
その凶悪さはまさしくモンスター。
「やはり角が脳まで侵食しているな。本当に死ぬぞ」
「そんなことはわかってんだよ!!　死ぬまで戦うぞオラァ！」

「貴様は勿体無いが、ならば死ぬまで待たせてもらおう」
ツノが脳まで？　硝子ならどうにかできないだろうか。
硝子でも大変な気がする。
相手が下がり、私はトリオンモンスターに駆け寄って呪霊を祓った。
「……なんか、お前が現れると呼吸が楽になるな。今更恋かよ」
「えっ」
トリオンモンスターは自嘲する。私はドギマギした。わ、わかってるよ、呪霊を祓ったのを勘違いしているだけだって。でも秘匿の規則があるから言う必要は無いよね！
手の甲にキスされる。かさりと手に何かが当たった。
「えっ」
次の瞬間、私は突き飛ばされてトリオンモンスターは消えてしまった。
「傑、あんなきょーぼーな鬼娘が好みなの？」
「うん」
「マジかよ。趣味わる」
ちなみにエイリアンは暫定非術師枠だそうだ。糞だな。

それから、私はこっそり抜け出して紙に書かれた場所に行った。
そこには黒いトリガーと彼女の遺書、荷物があった。ボーダーが来たら届けて欲しいとメモつきで。遺書を預けているのは何人かいて、地球の守りは彼らが引き継ぐという。
これから、もしトリオン兵が現れても彼女はいない。私はそれを受け取り、そっと隠した。
後日、報道で新たなトリオンモンスターが現れたと報道があった。
が。

どうしよう、くっそ弱くてトリオン兵に捕まってしまった……。
後継者何人いるんだろう？

その後、私はトリオン兵に襲撃され、助けに来たヘボ後継者を助けるためにトリガーを使い、呪専に囚われたのだった。

# トリオン⁇モンスター　いふ！後編

「こっ　この人たち、なんなんですか⁉」
「えーと、ごめん。いう事はできないかな」
「どっちの味方なんですか⁉　貴方も選ばれた人ですよね⁉」
「そうだけどこっちの組織にも所属してる」
「こっちの組織って何ですか⁉」
「えーと、秘匿義務があっていえない。とりあえず、トリガー解除はしない方がいいと思う」
　私は戸惑いつつも、大人しく拘束された。
　なんとか説得できれば良いんだけど。

　私は、縛られて目隠しをされた。
「傑」
「悟」
　悟の声がして、少しホッとしてしまう。
「そんなにあの鬼女、好みだったわけ？」
　戸惑いつつも、答える。
「そうだけど」
　頭をかく音がする。
「あいつ、何。トリガーって？」
「言えない」
「通じると思ってんの？」
「だって呪術規定だって、部外者に呪術師のこと教えちゃダメだろ。この件については、悟は部外者だから言えないよ」
「真面目か⁉　誰にだったら言うんだよ！」
「それはもちろん、関係者？」
「じゃそいつ言えよ。連れてきてやるから」
「言えるわけがないだろ」

「それより、さっきの子、離してあげなよ。一般人に迷惑を掛けないのが規則だろ」
「あのな。心配してる場合か。俺に話さないなら、他の奴が受け持つことになる。尋問されるぞ」
　私は、一生懸命考えた。
「それでも、言えないよ。勿論、向こうに聞かれても、呪術界の事については黙ってるし」
「あのな、あのエイリアン？　との戦いで何人攫われて何人命を落としたと思ってるんだよ」
「そんな事言われてもね。呪術師だって呪霊のする事全てに責任は持てないだろ？」
「呪術師は国の承認を得てる。お前らは得てんのか？」
「えーと、駄目だよ、言えない。私が勝手にベラベラ話していいことじゃないよ」
「真面目か!!　あのな、ふざけている場合じゃないんだぞ。本当にお前やばい立場だし」
　そんなこと言われても困る。
「……駄目だよ、やっぱり規則を破るのは悪い事だし」
「命が掛かっていても？」
「あー……死にたくはないなぁ」
「じゃあ言えよ」
「ちょっと待って。遺品を渡してもいいものかどうか考える」
　どうせだったらブラックトリガーになって悟に貰われたいけど、それって勝手に譲渡してもいいものなのか。
「遺品？　もしかしてあの女のか」
「いや、私の遺品を君に」
「ふざけんなよ!!」
　ガンッと蹴られる。
「痛いな！　動けない相手を蹴るなよ」
「言わなきゃ尋問はこんなもんじゃねーんだよ！」
「耐えられなかったら大人しく自害するよ」

「あのさあ！　ほんっとお前!!!」
「悟。もう良いそうだ」
夜蛾先生の声がする。
「いや、絶対俺が説得するから」
「悟」
静かな声。
「傑。言えよ！　今すぐ言え!!」
「悟、ごめん」
まあトリオン体だからきっとなんとかなる。なるといいな……。
私は頑張った。一緒に捕まった人も頑張ったらしい。
トリオン体だと痛みを感じなくすることができるのが幸いした。
でも辛いのは変わりない。ブラックトリガーになるしかないかな……。
そんな時、政府から来たという人が面会に来た。
「エイリアン対策室です。あなた方からお話を伺いたい」
「えっ　この場合どうすれば？」
「洗いざらい話してくだされば、それで結構ですよ」
私は困った。この人も係の人といえば係の人なのではないか？
「その」
私はそれでも言葉を飲み込んだ。
「いや、すみませんが、使いがちゃんと来ると思うので、それを待ちます」
「使い？　それは君の所属している組織かな？」
「それは、言えませんが……」
「呪術師は秘匿された組織だ。本当に君がここに囚われていることに気づき、助けに来てくれるのかな？」
「その、でも、すみません」
彼女は遺書で、ブラックトリガーがボーダーか類似する組織に渡らない場合は壊してくれと頼んでいた。
ネイバーの手に渡るのも、兵器として利用されるのもゴメンだと。
だから、私は。

「……すみません」
「では、こうしよう。わたしたちで、君達の組織に呼びかけて窓口の存在を教える。そのための最低限の事でもだめかな」
「お願い、します。ボーダーという組織です」
「わかった」
　それから、十日が経った。また悟が会いにきた。
「ボーダー、ちっともお前らの事助けにこねぇんだけど？」
「時間が掛かるのは仕方ないよ」
「なんで？」
「言えない」
　ため息。
　手が、私の手を包んだ。何かを握らせる。
「!!」
「お前のお友達。渡していいかどうかわからない遺品ってこれ？」
「そうか……」
「なあ、もう一度聞く。あんな鬼女がそんなに大切？　付き合ってたの？」
「違うよ。でも、頼られたからね」
「……はっ。じゃあ、俺が頼ったら同じ事してくれんのかよ」
「もちろん」
　しばし、間が訪れた。
「じゃあ、助けてくれって言ったら助けてくれんの？」
「もちろん。親友だろ？」
「じゃあ、言えよ！」
「それは出来ない」
「あのさあ！　街がエイリアンに襲われて大変なんだよ」
「出してくれれば応戦するよ。戦い終わったらちゃんと戻るし」
「傑！　……いや待て。それ縛る？」
「信じられないなら縛るよ。ここからちょっとの間でも出たいと思ってるし、君には悪いと思ってる。私は、呪詛師になりたい訳じゃないんだよ。今でもちゃんと呪術師のつもりだし、ボーダーのつもり」

「そうかよ」
そして、私はそこから出された。
たまには生身でお風呂に入りたいけど、無理だよね。
いつも通り補助監督に送られ、いつもと違ってトリオン兵と戦った。
「待て！　俺はボーダーだ！」
「!?　いや、ボーダーが地球を攻撃するはずないだろ！」
「ちっ騙されないか!!」
あああああ！　どうしよう、本物と会ったこともないのに本物と偽物の区別つけなきゃいけないわけ!?
不安を抱えつつ、ネイバーを撃破し、呪専の牢屋に帰る。
そんなことが数回続いた。

その後、予想通りボーダーと名乗る人が面会に来た。
「よく頑張ったね。ブラックトリガーを渡してもらおう」
「お断りします。貴方がボーダーだという証拠を見せてくれるまでは」
「いいだろう。トリガーを見せるのでいいかな？」
「そんなのネイバーにも出来ますよね」
「なら、どうする？」
どうしよう。
嘘発見器とかないのかな。
「ええっと、ボーダーのシンボルの由来を教えてください」
「いや、すまん。不勉強で知らないんだ。本部と今、連絡がつかなくてね」
苦し紛れの言葉にまさかの返答が返ってきた。
「ついてきてくれれば、証拠が見せられるんだが」
「実はネイバーでマザートリガーへの生贄コースは嫌です」
「だよねぇ。うーん。困ったな。どうすればいい？」
「私が聞きたいです」
そこに、悟が来た。

「傑。ボーダーってやつがまた来た」
　はい、片方は確定で偽物。
「いやー。面白いことになってるみたいだね。……助けに来るのが遅れてごめんね。俺はボーダーの迅悠一って言います」
「信じるな、偽物だ」
「あー、はいはい。本物がどっちかわからなくて困ってるんだろ。いい解決策がある」
「本当ですか？」
「ああ。ボーダーはこちらの世界にボーダーを作る手伝いをする。業務は侵入者の撃退。条件は、君のボーダーでの勤務。正直にいえば、持ってるトリガーくれ、というのが本音なんだけど、やっぱりこの世界の人のトリガーは奪えないでしょ。灯里ちゃんも結局助けられなかったし、灯里ちゃんのブラックトリガーは君が使えば良いよ。ただし、対価としてそっちの技術情報と資源を少し欲しいかな」
「はい！」
「……技術情報はこちらも提供できる。騙されるな、そいつはお前達のデータが欲しいだけだ！」
「なら、提供してもらおうか。本物でも偽物でも、この世界が侵略から自衛できるならそれが一番だろ？」
「は……はい！」
　そこで、悟が口を開く。
「つまり、傑はもうなんでも話せるって事でいいか？」
「そうだね。でも俺達の方が持ってる情報多いと思うよ？　夏油君もまだ不安だろうし、俺達がちゃんとボーダーの基礎を用意した後に夏油君から話を聞きたいかな。もちろん、その時には俺にも君たちにも話をしてくれるよな、夏油君」
「ちっ」
「はい。はい。はい……」
　私は安堵で涙を流す。
　トリオン体でも、尋問はきつかったのだ。
「夏油君は丁重に扱うこと。代わりに情報はいくらでも渡すよ」

そして、私は迅悠一に助けられたのだった。
後で、政府からの告知で他の後継者が死ぬ気でネイバーに潜入し、ボーダーを探し出してくれた事を聞いた。そうして、この世界にもボーダーは出来たのだった。

そして、呪専の隣に建てられたボーダー支部で、私はへちょっとなっていた。
「おかしくないかい!? 呪術師でありボーダーであるっておかしくないかい!? 呪術師ってだけで大変で忙しくて死にそうなのに!!」
「仕方ねーだろ、お前のボーダーへの所属が条件での情報提供だったし」
「うう。ごめん、悟」
悟もボーダー勤務である。本当にごめん。悟だって忙しいのに。
「ほんまやで、一つ貸やからなー傑くん」
「一番楽しんでる人に言われたくないね、直哉」
直哉は転校してまでボーダーに入った変わり者である。呪術があるんだからいいじゃないか。
なお、ボーダーは年齢が小さければ小さいほどトリオンの伸びがいいということで、最年少は真希ちゃん真依ちゃんという幼児である。流石に実戦には連れて行ってないが。
最年長は迅悠一の連れてきた甚爾という人で、なんでもこの人がボーダーを抜けると大変な事が起きるらしい。彼は未来予知のサイドエフェクトを持っているので、なんとか引き止められるよう頑張っている。
並行世界と言っていいど酷似したボーダー本部のある世界だが、この世界との差異は割と大きく、なんと言っても呪霊がいない。

術師なら呪霊を産まないという仮説を間に受けて向こうに行って呪霊を発生させて大目玉を食らったのは黒歴史だけど、呪霊がないから平和になれるわけでもないということを知ることができたのは大きかったと思う。

とにかく、差異がないようで大きい世界では、考え方が違うのかトリオン技術の進む方向性が違い、お互いにいい影響を与えられている。

ブラックトリガーも、そのうち解除できそうだ。

ハッピーエンド、と言っていいだろう。

ただし。

「絶対過労死する……」

「恨みますよ、夏油さん」

「まあまあ、ペイルアウト使えるようになって生還率上がったじゃん」

「任務数がその分増えてるんですよ！」

「トリオンも呪力も多い勝ち組どもは大変だな。まあ私はトリオンほとんどないし、仕事減って嬉しいけどな」

「俺はクラスメイト増えて嬉しいけど」

悟は本当に強いなぁ！

さっさとブラックトリガー解除方法探して、灯里さんにバトンタッチして呪術師に戻りたい。

戻れるよね？　戻れると言って。

私ははふぅとため息をついた。